Japanese Council of Science Museums Newsletter Vol.36. No.2

全科協ニュース

URL http://jcsm.kahaku.go.jp

全国科学博物館協議会 〒110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成18年3月1日発行（通巻第207号）

特集：ボランティア活動の現在

一学芸員の解釈によるボランティア活用のすすめ

熊本市立熊本博物館　学芸員　　清水　稔

熊本博物館には〝博萌会（はくほうかい）〟という団体がある。博萌会は、1991年に発足した博物館案内ボランティアで、博物館のボランティアとしては、比較的歴史の長い団体と言えるのではないだろうか。28年もの間、展示内容が大きく変化していない当博物館においては、来館者にみずみずしい情報を伝える手段としてなくてはならない存在となっている。現在は展示案内だけでなく、種々の講座、催しの際のアシスタントや収蔵資料整理の手伝いなどもしていただいている。これまでに会員の募集と養成講座を8回行い、現在78名が会員として登録している。

ボランティア担当職員の実情

職員にはそれぞれ職務分担というものがあるが、私は就職してからこれまでの7年間、ずっと博萌会を担当している。このように書くと、とても熱心な担当職員で、ボランティア活動に理解があり、常に会の世話をしているという風に思われがちだが、実際はそうではない。この原稿の執筆依頼の際、「ボランティア活動に関する問題点などを･･･」と言われたが、ほとんど自立した団体なので特に世話をしているわけでもなく、積極的に運営委員会などに参加して議論に加わっているわけでもないので、問題点などしっかりと把握しきれてはいない。館と会との橋渡しという最低限の仕事さえも満足にこなせていないちゃらんぽらんな担当なので、このようなところでボランティアについて論じられる立場ではない。

私がボランティアを担当することになったのは、『ボランティア＝無償奉仕』という程度の認識しかもっていなかったことによる。「他人のために、無償で働く？」「この人たちは一体何を考えているんだろう？」「そもそも、ボランティアってなんだ？」というわけで、自分には理解できないことをやっているのがどういう人たちなのか知りたくて関わってみることにしたのだ。ボランティアに理解があるから担当になる人もいるであろうが、ボランティアの何たるかがわからないから担当になる職員もいるのである。

高齢化は問題か？

いいかげんなボランティア担当職員ではあるが、彼らのより良い活動のために少しでも何かを得るべく、昨年12月に開催された第6回全国博物館ボランティア研究協議会に出席した。そのなかで各館による現状報告も行われ、各々の抱える悩みや問題点について知ることができた。博萌会も15年の長きに亘って活動しているが、大勢の人が集まれば意見の集約も容易ではなく、問題は小さなものから大きなものまで絶えることなく生じている。そのようなわけで、発表の多くにうなずきながら聞き入っていたが、複数の館から合点のいかない意見も挙げられた。それは、「ボランティア会員の高齢化」である。新規加入がないことに由来する高齢化問題は理解できたが、なかには「高齢者の多くにやる気が見られない」や「新しい知見を取り入れようとしない」といった理由からの発言も見受けられた（解釈の誤りかもしれないが）。もちろん、体力や視力の低下に伴って集中力や根気が続かなくなるといったこともあるであろうが、「やる気」に関しては個人の資質の問題であり、年齢の問題ではないはずだ。博萌会にも高齢の方が多いが、最も意欲的に活動しておられる人たちの何人かは80歳を越えている。私は、寝食を忘れて活動に没頭しがちな何人かの

考古資料整理の様子

健康を心配してはいるが、高齢化そのものに関しては心配していない。

私のような職員が、なぜ7年間もボランティアの担当を続けられているのか？　理由は単に、彼らと関わっているのがおもしろいから。それは、高齢の方が多いことと大いに関係している。やはり亀の甲より年の功、立ち居振舞いひとつにも含蓄があり、黙って見ているだけでも学ぶことは多い。〝学ぶ〟は〝喜び〟につながるものであり、博物館をより良いものにしようと思えば、この人的財産を活かさない手はない。

ボランティアとは？

私が就職したばかりの頃、博萌会の会員たちと接していて最も驚いたのは、彼らの年齢を知ったときだった。生き生きとした表情にだまされるのか、みな実年齢よりはずっと若く見える。この人たちは、なぜこのように楽しそうに活動しているのだろう？　「ボランティアは楽しいか？」、「何のためにやっているのか？」、「始めたきっかけは？」等々、知りたいことは子どもの質問のようなことばかりだった。ストレートではあまりに恥ずかしいので、彼らの言動には常に注目しつつ、それとなく会話を誘導してみたり、学芸員資格取得のための実習生に〝実習〟という名目で訊ねさせてみたりして、理解のための材料を少しずつ集めていった。

個々のエネルギーの源は、「これまでに得たものを社会に還元したい」「博物館や学芸員の力になりたい」「来館者と接するのが楽しい」「ありがとうと言われるのが嬉しい」「知識が増えていくのが嬉しい」「健康管理に役立つ」・・・等々。以上に共通するものは、それらが達成されたときに得られる「嬉しい」もしくは「楽しい」という気持ち。一見、利他的な「博物館のため」や「社会のため」も、突き詰めれば「自分のため」だと考えられる。最近、ようやく〝ボランティアとは何ぞや？〟に対する答えらしきものが自分の中で形成されつつある。

ボランティア養成のすすめ

私の理解によれば、ボランティア活動はする方としてもらう方との双方にとって実のあるものでなければならない。また、生涯学習の場でもある博物館がボランティアを

民俗展示室案内の様子

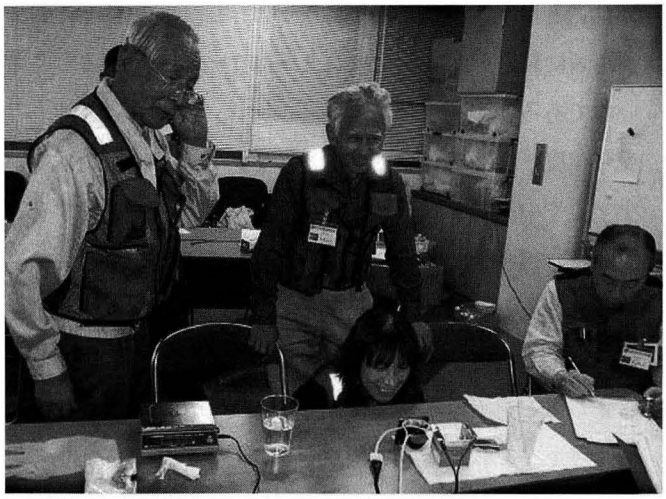
募るということは、同時に学習の機会を提供しなければならないことを意味する。

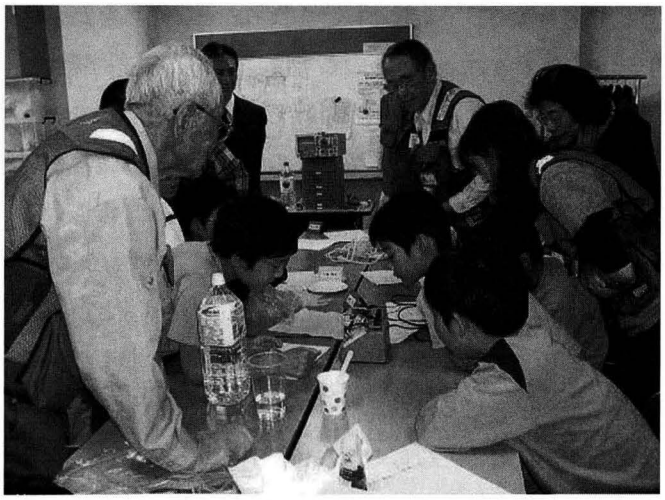
熊本博物館には、膨大な数の未整理資料がある。そのうえ、資料というものは常に増えていくものなので、雑多な仕事に忙殺される学芸員だけでは到底さばききれない。一方、資料整理をやってみたいという会員はかなりの数に上る。この状況だけを見れば渡りに船なのだが、話は簡単ではない。私の担当する動物の標本などは、普通の人が見れば魚や虫などの死骸に過ぎないが、土器や古文書と同様に博物館資料という公の財産であり、やはり細心の注意をもって扱わねばならない。資料だけ渡してあとはおまかせというわけにはいかない。ボランティアの方も、与えられた仕事をただ機械的にこなすだけでは満足感は得られないであろう。博物館業務の効率化の推進と、彼らの知的欲求の充足を同時に実現することが理想である。悠長なことを言っていられないのが現状であろうが、資料の扱い方の講習，その仕事の意義や学問的価値の説明，簡単な勉強会など、それなりの時間は費やすべきであろう。博物館としては、ボランティアに何が提供できるかということも考えなくてはならない。

最初に手間と時間をかけることでボランティアが何人かでも養成でき、その活動が軌道に乗るならば、それが博物館のため、ボランティアのため、そして学芸員自身のためにもなる。学芸員のみなさん、ちょっと時間を割いてボランティアの力を活かすことを考えてみようではありませんか。これは、なかなかそれが実行できない自分自身への呼びかけでもある。

公共サービスの可能性を広げる科学館ボランティア

多摩六都科学館　管理運営課　　神田　正彦





科学実験を行うボランティアと子供たちの様子（左　準備段階、右　実施時）

写真は、多摩六都科学館のボランティアが企画・運営している電気の実験教室で、準備段階と実施時の電気を使ってパンを焼いている場面である。実験準備でデータを取っているボランティアの表情には、実験でパンを上手に焼くために電流計を見つめる子供たちと同じ笑顔が宿っている。実験の成否をハラハラしながら見守るうちに、教える／教えられるという関係を突き抜けた共感が生まれている。できあがった熱々のパンをいっしょに食べるときには、皆が共に過ごした時間の温かさに包まれているようだ。そのうち、終戦後の食糧難の時代、電気パンを作って食べた記憶がよみがえる人がいて、切れた電線を拾って同じことをした経験を語りだす。科学には「最先端」「学術的」といったクールなイメージが強いが、この瞬間、個人の人生経験と今行った実験が結びつき、記憶の中の情報が形をとって現れ、「文化としての科学」の継承という意味が浮かび上がってくる。世代を越えた交流の仕掛けとして「科学」が

あり、アツアツの電気パンは子供たちの記憶に小さな温もりをのこすことであろう。

1　科学館で行うボランティア活動の特徴

科学館ボランティアは現在約80人が登録されていて、過半数が男性、70歳以上の方が2割程度を占める。科学技術を専門に学んだり、仕事としていた方は全体の3割程度で、決して多数ではない。子育てに一息ついた主婦の参加も多く、長く続けてくれていることが特徴である（3年間以上が4割）。

ボランティア活動にも、当館のミッションである科学的現象の理解や探究、実験・検証など自然科学特有の学習目的がある。しかし言語的情報の伝達よりも実際に体験し、感覚や感情に根ざした疑問、発見、達成感などを重視したプログラムを目指している結果、一見、遊びとほとんど見分けがつかないものも多い。特にボランティアが運営する「ハンズオン・コーナー」で行われているのは、知恵の輪、パズル、折り紙、塗り絵、マジックバルーンの動物など、どれも子供向けの遊びである。ボランティアが低年齢化するビジターにいち早く対応し、これらの遊び道具を充実させてきた成果と言えよう。ここでは、いったん「科学教育」という呪縛をはなれ、子供の目線で、楽しく居心地のいい場所を提供しようとするもてなしの心があり、保護者も安心して遊びに加われる雰囲気を醸し出している。「難しくて科学には縁がない」と言っていた主婦のボランティアが、子育て経験の底力を存分に発揮している。展示室という未知の異空間を進んでいくと、広場や隅っこで、なんだか楽しそうなことをしている、私もやってみようかな、実験とかは難しくてもこれならできるかな、という気にさせるあたりが、目線を低く保ったボランティアの強みであり、家族で楽しむことや、幼児を中心として、ほっとする居場所づくりのアイデアがボランティア個人の経験から生まれ出てきている。実際にボランティアの周りには、幼児を抱っこした保護者のお父さんお母さんから、孫のお付き合いのお年寄りまで幅広い年齢層が集まってきて、どこかの街角のような光景が見られる。だれにでもできる遊びばかりであることに加え、小中学生から高校生、大学生、社会人、シニアとボランティアの年齢層がはば広く、生活者として利用者に親近感があるためコミュニケーションがとりやすいのであろう。

ハンズオン・コーナーでの遊びのようす

今年度から、ジュニアボランティアという制度を設け、小学生や中高生が成人のボランティアに混じって仕事をしている。科学館には何度も見学に訪れたことのあるジュニアたちであるが、アンケートをとると、自らがサービスの提供者に身を置くことの意義を理解し、お客様に喜んでもらえることを素直に喜んでやりがいとしている。子供たちへのキャリア教育という視点を重視しているが、現場の評価としては、子供同士による積極的な働き掛けが功を奏し、

主なボランティア活動

名　称	内　　容	活動人数・期間
ハンズオン・コーナーの科学遊び体験	知恵の輪やパズル、マイクロスコープなど「遊びの場」を運営	3～5人・毎日
特別展、企画展の案内	企画展示の案内監視、及び小規模ワークショップの運営	2～5人・会期中毎日
天体観望会の受付・案内	天体観望会の受付、場内案内、安全管理	希望者数人・年間4，5回開催
観察教室の運営補助	身近な昆虫やプランクトン、植物などの観察を行う教室の助手	希望者数人・月4，5日開催
ワークショップの開催	自主企画による実験、工作のワークショップの実施	希望者数人・適宜実施
学校団体向け講座の開催	エネルギー講座など、学校団体向けの学習講座を開催	5～10人・適宜実施（年間約20校）
地域子ども教室の運営（文科省委託適用事業）	科学好きな子どもの居場所づくりを目的に、月ごとの連続講座を開催。	5～10人・毎週土曜日

遊びのプログラムを発展させる事例が報告されている。

2　外注管理による民間のスタッフとの協働

当館では設立以来、展示、学習室、プラネタリウムといった学芸的な専門機能をすべて民間の事業者に委託しており、５市の共同運営と企業への外注管理という独自の経営を行ってきた。これらの教育スタッフは、各々企業の社員であるが、博物館や教育施設に関する専門性や経験を有し、業務を遂行するうえでプロフェッショナルな意識が非常に高い。運営の柔軟性や、コスト削減のノウハウにも企業の独自性が見られる。半面、業務仕様を超える付加的なサービスや、新規の飛び込み企画などへの対処には契約上の制約もある。また、公務員の研修や人材育成と違い、企業には市民としてボランティアをパートナーにしていこうという意識は元々低い。顧客という概念と市民との協働という考え方のずれもある。

特にボランティア制度が後から加わったものであるため、同じエリアで教育スタッフが既に独自の事業を展開している中で、初めはお互いに戸惑いや軋轢があった。教育スタッフがボランティアを導入する意義を十分に理解するのに時間はかかるが、その間、皆が協力を惜しまなかった。ボランティア側も仕事の目的と内容を徐々に理解し、班単位の活動とすることで責任と義務の自覚が形成された。当初は、教育スタッフと業務範囲を明確に住み分けることに注意をしていたが、天体観望会や企画展示などのイベントでは、ボランティアが積極的に協力をしている。一歩進んで、現在では、次のような協働の事例が定着している。

① ボランティアの展示ツアーによって、初めてのビジターへ施設全体のガイダンスや見どころを案内し、受付業務と展示スタッフによるインタープリテーションのつなぎ役となる。

② 特別展会場で、展示スタッフが小学生に昆虫の解説をして生体に触れさせている間、ボランティアはカラーワイヤーや紙を使って昆虫の工作を行い、イベントのターゲティング外（対象年齢よりも下）の子供たちをフォローして興味付けをする。

③ 学習室スタッフによる「ライセンス制度」で、教室の助手としてOJT（職場訓練）を受け、子供へのサイエンスコミュニケーションの基礎を「修了した」ボランティアが教室の一角を任される。アウトリーチで学校への出張を行う際のスタッフも、ライセンス保持者である。

3　市民参加の場作りと地域ボランティア構想

民間事業者には専門的技能の高い人材を適宜採用し、目標管理を行って効率的にマネジメントを行える組織体としての柔軟性がある。また即座に一定の業務水準を築き、評価にも機敏な対処を取ることができる。しかし各々専門のセクションに分かれ、契約による業務の請負責任の枠と枷がある。ボランティアは個人の自発性を原則としていて、より自由な取り組みが可能であることから、館内のニッチ（専門の隙間）を捕らえたプログラムづくりや、ビジターとのフラットなコミュニケーション、自ら地域の課題に取り組む独自の活動など、幅広い可能性を持つ。地域の現状と過去（歴史）に根ざした、さまざまな思いや記憶を持ったボランティアには、科学や学術の匿名性を引き剥がし、人間が生きるうえで関わってきた科学や技術の深い蓄積がある。設置者側の職員には、企業活動のダイナミズムとボランティア固有のリソースが相互に働きかけ、地道な協働を推進する仕組みをつくる知恵と想像力が求められている。

多摩地区で顕在化しつつある高齢化の加速や、退職者世代の学習機会の創出、新たな転入世代の子育ての拠点作りなど地域特有の課題や、研究機関、大規模工場の移転・廃止など地域固有の歴史をもっともよく知る市民ボランティアの存在は、地元に根ざした活動を目指すわれわれにとってかけがえのないものである。

科学館の計画では、「地域ボランティア構想」によって、ライセンス制度やアウトリーチの経験を踏まえ、館という拠点を離れた地域の中のボランティア活動を支援していくことを中期的なビジョンに掲げている。その中で科学館の運営や組織のあり方も変容していくことが想定されるが、ボランティア活動に見られる市民の側からの働きかけと、専門性を土台に地域へ開かれた運営を行う施設が相互に学習し、常に高めあう関係でありたいと願っている。公共のサービスの主体やあり方が問われる中、サービスを受ける利用者と提供者、そして購買者（納税者）のすべてを備えたボランティアを運営の基軸に置くことで見えてくるものは非常に多いものと考える。

「本物に触れて！輝いて！」
文化ボランティアが学校・地域と美術館・芸術家、行政をつなぎ、国際交流へとその輪を広げる

子どもの美術教育をサポートする会　　津屋　結唱子

平成12年度より、「すべての子どもたちに本物の文化・芸術・伝統に触れる機会をつくりことで、豊かな感性と心を育てる」を理念に、当時では、それまで難しいとされてきた学校と美術館・芸術家との連携を、文化ボランティアが双方の意向や要望を調整することで、全国的にも先駆的な連携授業が実現、平成17年迄で延べ小・中・養護学校30校、延べ1万7千人の生徒たちに、また、公民館などの地域の子どもたち千人に本物に触れる体験プログラムを実施しました。各教科および総合的学習の時間において、地域のアーティストや美術館・博物館の学芸員が文化芸術に係る専門性を発揮することで、学校現場では普段とは違う子どもたちの輝く表情から、年々依頼する学校数、継続学校数ともに増加、毎日が「忙しい」と言えることに、スタッフ一同幸せを感じつつ、次から次へと課題が見つかり、「連携」というテーマの奥深さ、また楽しさを痛感しています。

活動の中心は、学校と美術館・芸術家との連携コーディネートと当日の子どものサポートで、コーディネートを主とする新しいNPO活動のあり方からか、この数年は学生の参加の輪は広がり、主婦など大人15名に、学生が40名参加、大学関係者との連携も深まっています。

活動の始まりは、私自身、母親として日々の生活に追われながらも、「子どもたちの心を育てるためにどういった方法があるのか。」とその答えを求めて、学生時代から模索していました。そして、世田谷美術館での教育普及プログラムとの出会いが大きな転機とり、子どもたちの表情を見る中「美術教育」の中にその答えがあると感じました。その後、体験プログラムに参加し、欧米、欧州の美術館を20数ヶ所見学し、演劇や音楽も含め、芸術教育に関するプログラムを見つめてみました。そしてわかったことは、「子どもたちに本物と触れ合う体験を与えることこそが重要である。」ということでした。そして、美術館に来れない子どもたちにこそ支援が必要。そして「本物との出会いの機会を、すべての子どもたちに平等に与えられるようにするには、美術館と学校が連携するしかない。」と思いました。しかし、何も繋がりのない私は、ただ１人思い巡らすしかありませんでした。

そうした中、滋賀県へ移り住むことになり、全く馴みのない関西へ移住と、美術館でボランティアを受け入れる館があるのか、と不安ばかりでした。しかし、滋賀県立近代美術館、県立陶芸の森、MIHO　MUSEUM、県立琵琶湖博物館では、教育普及に関心の高い学芸員さんがおり、「ここでなら何かできるかも知れない。」と思いました。そして、平成11年の12月、１人の美術教育を専門とする小学校校長先生と出会いが、すべての始まりとなりました。校長先生は共感と理解をしてくださり、「うちの学校でやってみて。」とおっしゃってくださり、美術館側にも学校側にもキーパーソンがいるという幸運な出会いから、美術館と学校と地域ボランティアとの連携授業が実現しました。人との１人との出会いの重なりでしかありませんでした。そして、１つの学校からまた１つと年々、活動の輪が自然と広がっていきました。

本年７年目を迎え、「連携をコーディネートする」ということに重点を置いて活動してきたことで、多くの美術館・博物館、学校、地域（公民館など）、文化行政、教育委員会とのネットワークが広がりました。

現場では、美術館・芸術家の「提供できること」、学校・

トルコの小学校で茶道

自分で制作した抹茶碗でお茶会
（MIHO MUSEUMとの連携）

校庭で土面の野焼き（陶芸の森との連携）

地域の「求めていること」の調整をし、プログラムの内容検討を重ねることを一番重要としています。プログラムの叩き台はありますが、各学校・地域によって、すべて内容が変わってきます、完全なシナリオを提案するのではないのです。常に「一期一会」「十人十色」の体験プログラムづくりをすることで、双方の立場の理解と信頼が深まり、学校・地域ごとに個性のある体験授業が実現し、何より、検討を重ねることで相互理解が深まり、年々学校側も美術館側も意欲的になっており、多くの体験プログラムが誕生しました。そして、多くの学校が、年間授業計画に組み込むようになり、学校の伝統となる定着型の体験へと発展しています。これは、本当に嬉しい成果であり、６年間の積み上げで、広がりと深まりを感じています。また、平成17年は、文化行政との連携による地域での新規事業をいくつか実施し、県内の文化施設と地域とのネットワーク化に向けて事業を展開させています。

このように活動が広がってきたのは、任意団体でしかない私たちが、行政のさまざまな活動助成をいただき、平成15年より３年間、文化庁文化ボランティア推進モデル事業として支援をいただき、昨年６月には、河合文化庁長官が連携活動を視察くださり、関係者１人１人を励ましてくださいました。このような活動への応援により、元気をいただき、活動は深まり、連携の仕組みづくりができてきました。本当に多くの方々に育てていただいたと、いつも感謝しています。さらに昨年12月には、国際交流基金により、トルコの小学校２校で、文化芸術体験連携授業を実施しました。地域活動から世界へと、美術教育を通した文化ボランティア活動の無限の夢は広がります。

この文化ボランティア活動を通じて、「美術館・博物館でのボランティアの経験を地域に生かす」ということが大切であり、今は、地域のコーディネート力のある人材が求められている時代と実感しています。

この連携活動を通して、多くの子どもたちが目を輝かせる姿に接することができました。特に心や体に痛みを抱えている子どもたちが、集中して自分の作品と向かう姿、やりとげたときの笑顔、この子どもたちの表情の変化が、連携活動に関わる大人たちを結束させる原動力となっています。さらに連携の輪を広げ、文化芸術を通じた次世代教育の支援の可能性を探っていきたいです。

それぞれ異なる文化をもつ主体（学校・美術館・博物館）が出会って、「子どもたちに本物の体験を！」と１つのことを成し遂げるには、お互いを理解し尊重しながら事業を進めることが重要です。ともにメリットのある「WIN－WINの関係」「両者の喜び」というものを構築し、相互に高め合う関係作りを今後も大切にしてきたいです。いつまでも現場の視点で、美術館・博物館の強力な地域の応援団として、これからも子どもたちへの本物に触れる支援活動を続けていきたいと思います。

海外ニュース No.72 安井 亮

ヴィトラ・デザイン博物館（ベルリン）が、2006年秋に新装オープン

ドイツが世界に誇るヴィトラ・デザイン博物館のベルリンの分館が、2006年秋に新装されてオープンする。新しい施設は旧東ベルリンにあった古いビール醸造所の敷地内（テオトバーガー広場）に完成する。アディダスの本社ビルを設計したディエター・ティール（Dieter Thiel）が手がけている。Vitra Design Museum. Berlin.

http://www.design-museum.de/museum/berlin/

ウィーン技術博物館で、エア・ワールド展が2006年3月より開催

3月9日に開幕するウィーン技術博物館の特別展「エア・ワールド」では、初期のプロペラ機から最先端のジェット機の機体設計、機体内部の客室のデザイン、乗組員のユニフォームのデザインから空港のデザインまで、はては機内食のフォークやナイフのデザインまで、広く「航空の世界」で使われるデザインを紹介したものだ。同展は、もともと2004年にドイツのヴィトラ・デザイン博物館が企画した巡回展であり、すでにヴィトラ・デザイン博物館を皮切りに、ベルギーのゲント市にあるデザイン博物館とチューリッヒ空港を回ってウィーンにやってくるが、ウィーンでは技術博物館の独自の趣向を加えられる。ウィーン会場では、第二次世界大戦後にオーストリアの空を飛んだ単葉プロペラ機DH104ダブ（英国デ・ハビランド社）の胴体展示やオーストリア航空（OS）のスチューワデスの歴代のユニホーム等も見ることができる。2006年6月28日まで。ウィーンでの開催後、アムステルダムの市立近代美術館でも開催する予定だ（7月22日～10月29日）。

Airworld：Vom Reisen in der Luft. Technisches Museum Wien

http://www.tmw.ac.at/

http://www.design-museum.de/museum/ausstellungen/airworld/index.php

http://ksa.axisz.jp/a3708.htm

http://plane.boo.jp/Dh-104sekiya.html

ジークムント・フロイト博物館で、寝椅子（カウチ）をテーマにした企画展が5月に開幕

たかが寝椅子、されど寝椅子。そう寝椅子は週末の昼下がりにウツラウツラするのに格好の家具であり、また「カウチ・ポテト」用の家具でもある。この寝心地のいい家具はヨーロッパ人の生活では切っても切れないものである。また長く精神分析家のカウンセリングでも使われてきた歴史をもっている。そのため精神分析家の要求に応じて患者の効果的な治療のために多くの改良が加えられている。オーストリアが生んだ近代精神分析学の祖であるジークムント・フロイト（1856-1939）も、寝椅子のデザイン、機能性、患者の居心地良さに特に関心を向けていた一人だ。

5月5日に開幕する企画展「Die Couch. Vom Denken im Liegen」は、フロイトの生誕150年を記念するイベント事業の一つとして企画されたものだ。同展は、フロイトが特に関心を向けた寝椅子について、その発展の歴史、デザイン、居心地良さをさまざまな角度から検証したものだ。1873年のウィーン万国博覧会に出品されたオットー・ワーグナーやウィーン郊外にあるプンカーズドルフ・サナトリウムの院内にあった寝椅子等も見れる。会期中、アンディー・ウォーホールが制作した映画『カウチ』（1964年作品）も上映されることになっている。2006年11月5日まで。

Die Couch：Vom Denken im Liegen. Sigmund Freud Museum.

http://www.freud-museum.at/d/index.html

http://www.woka.at/infos/index.asp?go=deutsch/designer/purkersdorf.asp

ウィーン建築センターで、建築家ウォルター・ロースの回顧展が3月に開幕

ウィーン生まれの建築家ワルター・ロース（1905-1974）は、母国よりもナチの迫害に追われて亡命・移住したアルゼンチンでこそ名を馳せた建築家であり、建物の作品もさることながら、家具のデザインでもユニークな作品を残している。ウィーン建築センターで3月2日に始まる建築家ウォルター・ロースの回顧展「Der unbekannte Loos：Walter」は、35歳でアルゼンチンに亡命するまでの時期と、亡命先のアルゼンチンでの時期に分けて、ロースの活躍の軌跡を追っている。同展では、彼の建築思想から大きな影響を受け、後に夫人になったアルゼンチンの著名なファッション・デザイナーのフリードル・スタイニンガーの作品も紹介されている。

Der unbekannte Loos：Walter. Architekturzentrum Wien.
http://www.azw.at/event.php?event_id=563
http://www.azw.at/
http://www.design-museum.de/museum/berlin/

オーストラリア博物館で、アニマトロニックスのアート展が開催中

シドニーのオーストラリア博物館では、『怪物のつくりかた：アニマトロニックスのアートとテクノロジー』と題した特別展が開催されている。同展は、映画界で特殊効果アーチストとして有名なジョン・コックスが手がけたアニマトロニックスの作品が紹介されている。コックスは、最近公開された映画『レーシング・ストライプス』のキャラクター群や『ピーター・パン』に登場する犬のナナを始めとするアニマトロニクスの数々の制作を手がけており、愛知万博のクィーンズランド・ウィーク期間中にもそれらの作品が展示された。会期：2005年10月29日～2006年３月５日。

How to make a Monster：the art and technology of animatronics. Australian Museum.
http://www.amonline.net.au/visiting/whatson/
http://www.johncox.net/

サイエンス・ワールドで、おもちゃの科学展が開催中

バンクーバーのサイエンスワールドでは、おもちゃの科学原理を紹介した特別展が開催されている。会場では、木材と発泡スチロールを使って家をつくるコーナーや、コマまわし、ドミノ・チャレンジやミニ・ローラコースターが作れるコーナーが設けられている。会期：2006年１月27日～2006年５月７日。

Science in Toyland. Science World, Vancouver.
http://www.scienceworld.bc.ca/whats_on/

アメリカ自然史博物館で、ダーウィン展が開催中

ニューヨークのアメリカ自然史博物館では、2005年にダーウィン展が2005年11月19日に開幕した。同展では、ダーウィンの探検家としての業績と進化論を生み出した科学者としての彼のの素顔を紹介している。開催中、さまざまなプログラムが用意されているが、中でもアメリカ自然史博物館の人気事業であるツアーが2006年１月末と６月中旬の２回用意されている。The American Museum of Natural History's Discovery Tours によって企画されたツアーは、いづれもダーウィンの進化論の着想の源となったガラパゴス諸島へ出かけるもので、同展を手がけた学芸員の案内付きだ。ツアーの詳細：http://www.discoverytours.org/。同館での開催の後、企画の協力したシカゴのフィールド博物館、王立オンタリオ博物館とロンドンの国立自然史博物館で巡回することになっている。会期：2006年５月29日まで。

Darwin：For 21 years he kept his theory secret. American Museum of Natural History.
http://www.amnh.org/exhibitions/darwin/

カーネギー自然史博物館で、剝製をテーマにした企画展が５月に開幕

ピッツバーグのカーネギー自然史博物館では、剝製をテーマにした企画展が2006年５月21日に開幕する。同展ではカーネギー自然史博物館がもつ豊富な剝製標本の中から特に保存状態がいいものが選ばれて、剝製の技術と美しさが紹介されることになっている。中でも、もともとは100年前にニューヨークのアメリカ自然史博物館のために制作されたアラブの隊商を襲うライオンの剝製ジオラマが、大きな修復を経て公開されることになっている。100年前に制作され、会期：2006年５月21日～2006年９月３日。

Stuffed Animals：The Art and Science of Taxidermy. Carnegie Museum of Natural History, Pittsburgh.
http://www.carnegiemnh.org/exhibits/courier.htm
http://www.carnegiemnh.org/exhibits/index.html

シカゴ科学産業博物館で、建築をテーマにした特別展を開催中

シカゴ産業博物館では、古代ピラミッドから最新の超高層ビルまでをテーマに扱った建築展が2006年１月13日に開幕した。同展では、いま日本で関心が集まっている建物の耐震性の他、建物の建設に使われるさまざまな工具・建設機械や建築材料が紹介されている。またCADを使った家造りの設計プログラムも体験できるコーナーが設けられている。会期：２月28日まで。

Architecture：Pyramids to Skyscrapers. Museum of Science and Industry.
http ://www.msichicago.org/temp_exhibit/bc2006/exhibit.html

＊（やすい・りょう）

E-post：ZAKvaran@aurora.ocn.ne.jp

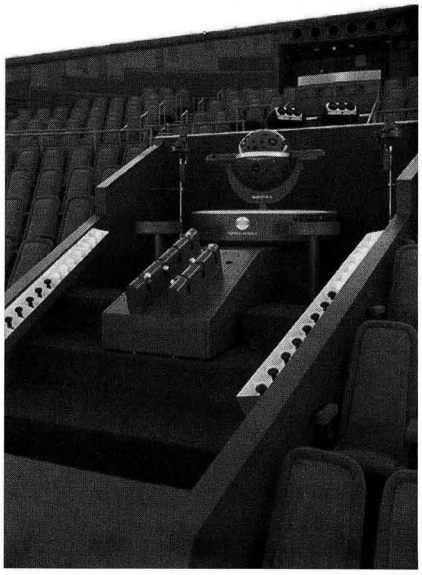
3月4月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
旭川市科学館　サイパル	特別展「大空に羽ばたいた恐竜たち」	4月22日～6月25日
むつ科学技術館	巡回展「電気をつくろう」（後援：財団法人つくば科学万博記念財団）	4月13日～7月13日
秋田県立博物館	企画展「くらしといのり」	12月10日～4月9日
ふくしま森の科学体験センター	特別展「科学遊園」	12月14日～4月9日
	特別展「木工アート展」	3月15日～4月9日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「天文ボランティアによる天体写真展」	2月1日～3月31日
	ホワイエ企画展「南天の天体写真展」	4月1日～6月30日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第36回企画展「サルを知り、ヒトを知る－自分たちを探る旅－」	3月18日～6月18日
栃木県立博物館	テーマ展「土のひみつ」	7月16日～3月31日
群馬県立自然史博物館	特別展「奥利根　その自然をさぐる」	3月18日～5月7日
さいたま市青少年宇宙科学館	ワクワクランド・春	3月11日～4月9日
	企画展「インセクトトレック（昆虫展）」	4月22日～6月18日
狭山市立博物館	春期企画展「金田一さん！出番です　～博物館で楽しむ横溝正史～」	3月18日～6月11日
埼玉県立自然史博物館	企画展「身近にいる新参者」	1月6日～3月31日
千葉県立中央博物館	春の展示「結晶とガラス」	3月11日～6月4日
	生態園トピックス展「春の鳥」	3月7日～5月7日
千葉県立現代産業科学館	展示会「笑顔が一番！介護・福祉の今・未来」	3月11日～3月19日
逓信総合博物館	第3回全日本年賀状大賞・第38回手紙作文コンクール中央展	3月4日～3月12日
	春休み宇宙フェスティバル　ていぱーくにロケットがやってくる！	3月18日～3月31日
	第56回全日本切手展２００６	4月15日～4月20日
国立科学博物館	特別展「世界遺産　ナスカ展　地上絵の創造者たち」	3月18日～6月18日
機械産業記念館（TEPIA）	「最先端技術展～日本の未来をひらく～」PARTⅡ	1月17日～3月23日
	「最先端技術展～日本の未来をひらく～」PARTⅢ	4月11日～7月21日
東京消防庁消防防災資料センター消防博物館	所蔵品公開展示「防火の知恵の歴史展」	1月14日～3月12日
板橋区立教育科学館	第7回ジュニア発明展	2月4日～3月5日
たばこと塩の博物館	特別展「広告の親玉～赤天狗参上！～明治のたばこ王　岩谷松平～」	1月28日～3月12日
馬の博物館	テーマ展「古代中国　馬と人間の歴史」	2月1日～4月9日
	「内藤律子　サラブレッド写真展」	2月1日～4月9日
	春季特別展「馬と牛」	4月15日～6月4日
横浜こども科学館	企画展「まり丸のボール道場－球体の科学と遊び－」	2月11日～4月4日
	企画展「発見！かがみの城」	4月29日～6月18日
東京ガス　環境エネルギー館	「エコKING」省エネアイデア作品展	2月7日～3月26日
新潟県立自然科学館	春の特別展「親子で楽しむ万華鏡展」	3月18日～4月2日
黒部市吉田科学館	巡回写真展「自然から学ぶ」	3月18日～4月9日
富山市科学文化センター	富山県ナチュラリスト協会写真展	2月18日～3月12日
	写真展「すばらしい自然を」	3月18日～4月2日
佐久市子ども未来館	開館5周年記念特別企画展「びっくり！ドッキリ！なるほどサイエンスPART-3」	3月4日～5月7日

開　催　館	展　覧　会　名	開催期間
中津川市鉱物博物館	第20回私の展示室「旅する種－植物の知恵と工夫－」	3月19日～7月2日
東海大学自然史博物館	特別展「川原の石と海岸の石」	1月2日～4月9日
豊橋市自然史博物館	収蔵資料紹介展「平成17年度新着資料紹介展」	2月4日～4月2日
鳥羽水族館	企画展「体感！おもいッきり飼育係展」	3月18日～2月12日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「古生代の世界」	2月18日～6月11日
明石市立天文科学館	特別展「天文の古代遺跡展」	2月4日～3月5日
	特別展「星図の世界展」	3月11日～4月9日
島根県立宍道湖自然館ゴビウス	企画展「ザリガニの秘密」	2月10日～4月3日
出雲科学館	電気と光のおもしろ実験工房	1月7日～4月24日
	木工創作教室作品展	2月25日～3月19日
	押し花作品展	3月21日～4月19日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「第13回しぜんしくらしき賞作品展」	12月11日～4月2日
	特別陳列「みんなで作る自然の展示会2006」	4月25日～6月11日
広島市江波山気象館	新春企画展「視覚・錯覚ミステリー」	1月21日～3月19日
広島市交通科学館	特別展「はたらくのりもの大集合」	1月24日～3月26日
防府市青少年科学館	企画展「きになる木のひみつ」	2月11日～3月12日
萩博物館	企画展「幕末長州藩の科学技術～大砲づくりに挑んだ男たち～」	2月4日～4月9日
あすたむらんど徳島　子ども科学館	第14回企画展「しかけに挑戦！からくりワンダーランド」	3月18日～4月9日
愛媛県立博物館	テーマ展「えひめ生きもの写真展」	2月3日～3月23日

▌展示更新▐

浜松科学館（静岡県）



[展示室名] プラネタリウム

愛称募集により、名前を付ける予定

[オープンの期日] 平成18年3月24日

[準備期間] 平成17年9月1日～平成18年2月28日

[導入方法] 2社によるプロポーザル

[施　　工] コニカミノルタプラネタリウム株式会社

[機　　種] GEMINISTAR Ⅲ

（「INFINIUM S」と「SKYMAX DS」）

[総 工 費] 346,500,000円（消費税込）

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

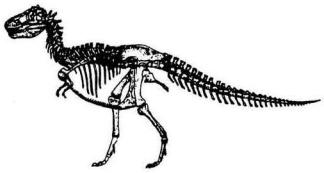
メディアグローブは世界で初めてフルカラー投映を可能にした小型・高精細のデジタルプラネタリウム。さらにドーム全天に高画質なCG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、さまざまなシーンで活躍します。

▶ 各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒163-0512 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル12階 TEL (03) 3349-5301
大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL (06) 6110-0570
東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL (0533) 89-3570
URL:http://konicaminolta.jp/planetarium/

※世界の化石・鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者


ティラノサウルス・REX

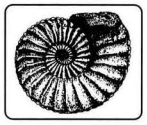
株式会社 ゼネラル サイエンス コーポレーション
〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表　FAX 03 (3584) 6247

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO.,LTD.
東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL(03)3221-1102㈹　FAX(03)3221-1185

動物園／水族館／博物館
企画・設計・施工

高品質表現力
文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工
kokoro
株式会社 ココロ
〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL：042-530-3939　FAX：042-530-4050
http://www.kokoro-dreams.co.jp/

TOKYO SCIENCE CO., LTD.
ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



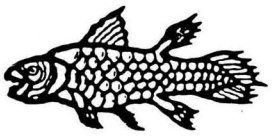
since 1974

地学標本（化石・鉱物・岩石）
古生物関係模型（レプリカ）
大英博物館／恐竜復元模型

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F　TEL.03(3354)0131(代表)
株式会社 東京サイエンス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
http://www.tokyo-science.co.jp　E-mail:info@tokyo-science.co.jp

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース
より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。
株式会社 丹青社
〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL http://www.tanseisha.co.jp

美術
はく製



〈各種生物〉
剝製・骨格標本・レプリカ
加工／販売／リース
有限会社 東洋近代美術研究所
製作所 〒272-0816　☎047-337-5678
千葉県市川市本北方2-18-1　FAX 047-338-1978
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25　☎047-374-1564
E-mail:toyobken@taupe.plala.or.jp

集まる理由を、ノムラは知っています。
「人が集う空間」という意味を、ノムラはいつもトータルで考えています。
集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、設計、制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理
NOMURA
株式会社 乃村工藝社
http://www.nomurakougei.co.jp
本社：東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171㈹

全科協ニュース編集委員会
ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長　國府田良樹
川口市立科学館サイエンスワールド 学芸係 久保田耕平
千葉県立中央博物館 教育普及課長　森田利仁
国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長　井上透
国立科学博物館 広報・サービス部 広報課専門職員　原田紀子
全科協事務局
国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課　守井典子
Tel.03-5814-9863　Fax.03-5814-9898
発行日　平成18年3月1日
発　行　全国科学博物館協議会©
〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印　刷　島崎印刷株式会社